上野彦馬とその時代

姫野順一

⑧ 高水準の風景写真

ベアトと出会い撮影術 飛躍

写真①は1866(慶応2)年2月ごろ、イタリア系イギリス人写真師、フェリーチェ・ベアトが撮影した上野彦馬(中央の樹木の右側に立つ)である。

写真技術と審美的センス、残した写真の量で卓越するベアトは第2次アヘン戦争終結後の1863(文久3)年春、長崎経由で横浜にやってきた。攘夷で緊迫する長崎を度々訪問して彦馬と交流し、彦馬の風景写真術を大きく飛躍させた。

大型カメラを携えてイギリスの軍艦に便乗し、1864(元治元)年9月の下関戦争の取材に向かったベアトは、同年7月に長崎に上陸して、港口、イギリス軍艦バロッサ号、大浦居留地、グラバー邸、眼鏡橋、海側からの出島、墓地と小島養生所、彦馬の屋敷、銭屋川、稲佐崎、大音寺、飽ノ浦の写真を残した。写真②はこのとき写した上野彦馬の邸宅である。

このときベアトは長崎で開業していた彦馬の撮影局を訪問し、不足する薬品を補充し、同じ写真師として道具や写真技術、薬品の話をしたものと思われる。

屋外撮影にはカメラはもちろん、薬品箱、種板箱、ガラスに塗布したコロジオンの感光映像を野外で定着させる携帯暗室が必要である。彦馬が野外での洗練された写真を撮れるようになったのは、初期にスイス人写真家ピエール・ロシエに出会って写真術に開眼したように、外国人の写真師による体験的な伝授が必要であった。

1866年ごろ製作された上野彦馬初期写真アルバム(江崎鼈甲店所蔵)には、多くの人物写真と共に彦馬とベアトの交流の痕跡が残されている。江崎鼈甲店の6代目栄造の妻ノブは彦馬の長男陽一郎の妻たけと姉妹であったため、彦馬亡き後、親戚として彦馬の初期写真が収載されたアルバムを引き取ったようである。

写真③は、彦馬が自宅から彦山を写した名刺大(5・4×8・5㌢)の風景写真である。小型カメラで撮った未熟さを残す最初期の風景写真とみることができる。

アルバムの最後には、ベアトが大型カメラで撮影した大判写真(約18×21㌢)の14枚(彦馬邸、大浦居留地、清水寺、大音寺、興福寺の鐘楼、長崎パノラマ、小曽根築地、伊勢宮神社、晧台寺墓地、飽の浦製鉄所、妙行寺、大浦川、大浦の製茶場、大浦パンド)が貼り付けられている。これらは彦馬がベアトから買い上げたもののようである。

このうちの写真④のパノラマ写真は、長崎大附属図書館が所蔵する、同じ種板から複製された写真に「1866年3月」とベアトの書き込みがあることから、撮影時点が判明する。写真①をはじめベアトが彦馬を写した写真も、この時期の撮影ということになる。ベアトはこの頃、彦馬と連れ立って長崎かいわいを歩き回り、写真を撮っていたわけである。

日本カメラ博物館が所蔵する、表紙に「ARD」と印字されたベアト・彦馬アルバムにも、フランス語で「1866年」と記入され、ベアトが撮影した風頭からのパノラマ、大浦川、精得館、本蓮寺、墓地の写真が収載されている。

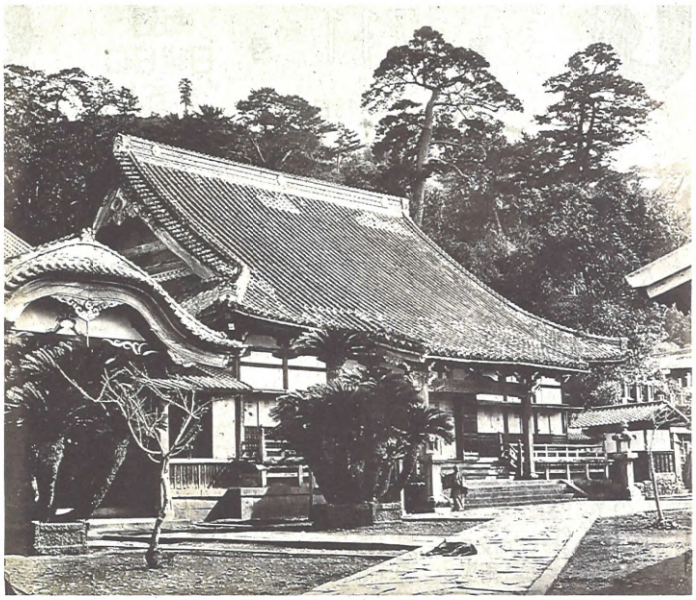
江崎アルバムには他に、彦馬が撮った手札大(約10×16㌢)の風景写真として、町中からの稲佐遠望、自宅からの風頭、大浦居留地50番付近、下がり松付近、大浦14番館、大浦居留地の建物群(写真⑤)、大浦天主堂、警衛隊の軍事訓練の場面が収載されている。

彦馬は中型カメラを持っていたようである。当時は引き延ばし機がなかったのでガラス種板からの紙焼きは密着焼きであった。中型カメラに小型の撮り枠をはめれば、小型の名刺写真の撮影は可能であるが、小型カメラで大きな写真は撮れない。彦馬はベアトの大型カメラが写し出す現在の8×10(エイト・バイ・テン、六つ切り相当)以上の大型写真に圧倒され、感動したと思われる。

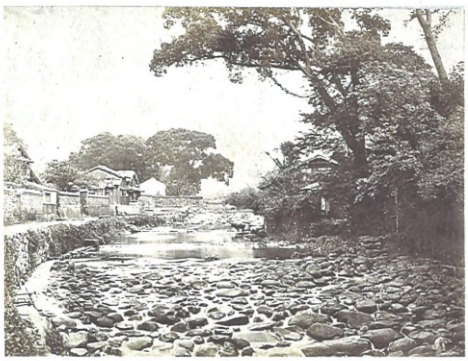
彦馬が大型カメラを入手するのは明治維新ごろで、それから風景写真の撮影術は飛躍する。写真⑥を含む1874(明治7)年ごろの彦馬のポートフォリオ(写真帳)や、73(同6)年のウィーン万国博覧会に出品された作品群は大型となり、構図や意匠がベアト写真の水準に到達している。

(長崎外国語大学長)

=偶数月の第3日曜付サンデーぶんかに掲載=



①大光寺における上野彦馬　ベアト撮影　1866年2月ごろ(長崎大附属図書館蔵)



②銭屋川河畔の上野彦馬邸　ベアト撮影　1864年7月(長崎大附属図書館蔵)

③彦馬邸から撮影した彦山　彦馬撮影(江崎鼈甲店蔵)

④風頭からの長崎港パノラマ　ベアト撮影　1866年3月ごろ　(長崎大附属図書館蔵)

⑤大浦居留地の建物群　彦馬撮影　1866年ごろ(江崎鼈甲店蔵)

⑥ドンの山からの大浦川付近　彦馬撮影　1874年ごろ(長崎大附属図書館蔵)

長崎新聞 2023(令和5)年6月18日掲載